

## 16 『素問攷注』の用字例

宮川 浩也

### 一、はじめに

森立之の著した『素問攷注』は、『素問』注釈書の最高峰と評され、高度で豊富な知識が盛り込まれている。しかし、ハイレベルの内容のゆえに、現在の私たちに理解できないところもある。そのひとつに『説文』にもとづいた用字法がある。これを明らかにすることは『素問攷注』を利用することの助けになるだろう。

### 二、『素問攷注』について

『素問攷注』は、森立之が安政七年（一八六〇）から元治元年（一八六四）にかけて書き上げた『素問』の注釈書である。ただし、序文に「旧稿の眼目を改めた」とあるから、旧稿（下書き）を書くことに要した年月を加えれば、実際には五年間以上の時間を費やしていることがわか

る。

立之は『素問攷注』注釈作業と相前後して、積極的に医書校勘を行い、この中でおびただしい異体字と格闘する。校勘した医書は、『千金方』、『素問』、『医心方』などである。

校勘は、テキストのすみずみを、文字の一点一画まで、厳格に比較する作業であるから、結果として多くの異体字を見つけることになった。こうした知識は『医籍文字捷見』に記録されている。いかに自体に関心を深め考察していたかが知れる。

### 三、段玉裁『説文解字注』

異体字の整理にあたっては文字学の知識が必要になる。森立之は、それを清・段玉裁（一七三五～一八一五）の『説文解字注』に得た。段玉裁注を熟読し、『説文』における正字を『素問攷注』の中で多く用いた。

①旁光 六府のひとつ「膀胱」を「旁光」とあらわす。

『説文』では「勝」は脇の意味で、「胱」は収められていない。ゆえに「旁光」が正字で「膀胱」は俗字だという（『脬字下段玉裁注』）。こうした表記は『淮南子』などにもみ

える。

②会易 「陰陽」は「阜」が意符になつてゐるから、『説文』では山と関係づけられている。思想用語としての「陰陽」は、『説文』では正字である「会易」を用いる。「これ(会易)が陰陽の正字である。陰陽が用いられて、会易は廃れてしまった」(易字下注)。

③臧 「五藏」の「藏」を「臧」に表す。段玉裁は「艸か んむりの藏を臧匿(かくす)の意味に用ゐるのは、漢末に 經典を改易したことに始まる。従ふことはできない」(臧 字下注)という。「藏」は『説文』に親字としては収めら れてゐない。この字は中国出土文献の『陰陽脈死候』の 中にも見える。

④散 「微妙」の「微」を「散」と書く。「イ」は歩行と 関連する意符で、『説文』では「微」はしのび歩きの意味 である。「古言」の散眇は、今の微妙で、「散字が廃れて、 微字が使われた」(散字下注)という。

⑤眇 「微妙」は『説文解字』では「散眇」に表す。「眇 は小さな目という意味であるが、小さいという意味に引 伸し、さらに微妙の意味に引伸し」「説文に眇字が無いが、

眇字が眇字に相当する」(眇字下注)という。

⑥偶 「称呼」の「称」を「偶」に書く。「禾」は禾本科 の植物をあらわす意符で、『説文』では「称」は植物を量 る意味にする。ゆえに『説文』では人を称えるという意 味では「偶」を用いる。「称字が用いられて、偶字は廃れ てしまった。称字は今の秤字である」(偶字下注)。

#### 五、まとめ

段玉裁の『説文解字注』は当時としての最先端の文字 学書である。同じく最先端の訓詁学書である清・阮元の 『経籍纂話』とともに『素問攷注』の核になっている。 こうした小学の知識は、『素問攷注』を読む時だけでなく、 江戸医学を読み解く鍵になるだろう。

(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部)